

「大学の研究」といって、研究室にこもって勉強するイメージが強くありませんか？ 横浜市都筑区と、同区内にキャンパスを置く東京都市大学（環境情報学部）が先月、それぞれ力を合わせて、地域に役立つ調査・研究を進めていこうと「連携協力協定」という「約束」をしました。これまで、約10年にわたってまちの人たちと一緒に調査・研究を進めてきた同大学の活動について取材しました。

▼市民に卒論発表

先月24日、都筑区役所の会議室に、同大学の大学生、区役所職員のほか、市民ら約130人が集まりました。学生が「都筑のまち」の市民団体や商店街の人たちに聞き取り調査などを重ねてつくった「卒業論文」や大学院生による「修士論文」を公開する「地域連携調査研究発表会」です。

この発表会では、12の論文が発表されました。港北ニュータウンの「お寺や神社」が所有する14カ所の森に実際に足を運び、木の種類や面積などについて調べた研究や、アーティストに協力してもらい、横浜市営地下鉄「中川駅」周辺の約30の飲食店の紹介を「おみくじ」の形にして提供する「おしよくじ」プロジェクトなど、ユニークな取り組みを学生たちが次々と発表しました。

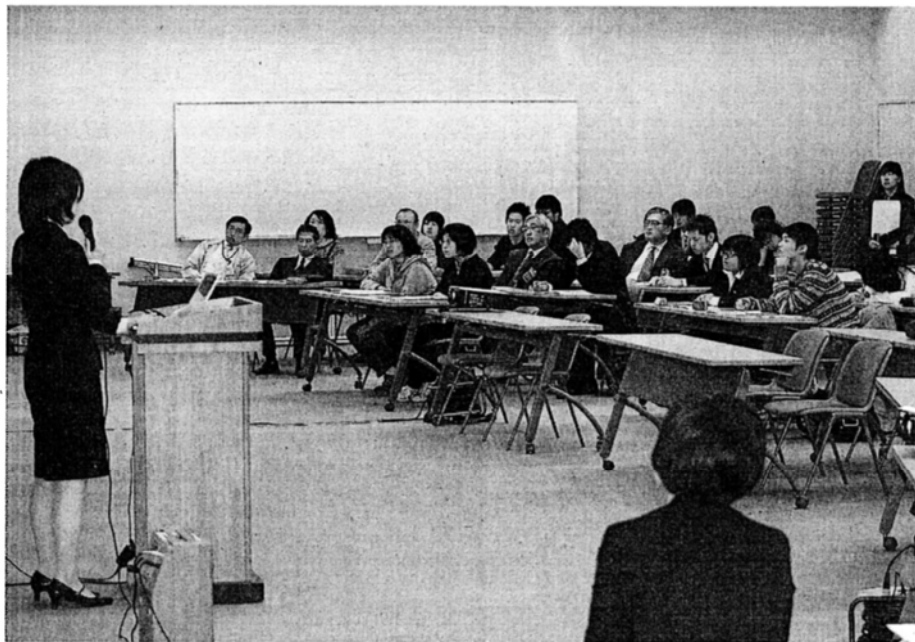
この発表会は、今回で7回目。地域連携を担当する同大学の中村雅子・環境情報学部准教授は「学生たちにかかわってくれた市民の方々や実際に仕事をしている役所の方たちの目で、研究を評価してもらえる貴重な場」と話しています。

▼地域課題解決を

都筑区と同大学の連携はこのほかにもたくさんあります。

同大学は2007年から09年にかけて、文部科学省から「現代GP」に指定されました。これは「現代的教育ニース取組支援プログラム」の略です。難しいタイトルですが、「社会や地域で困っていること」を課題

横浜・都筑区と東京都市大が協定 まちが学びのフィールド



都筑区役所で行われた東京都市大学生による研究発表

を解決するために役立つテーマの研究」に国がお金を出して支援する仕組みです。

この仕組みを活用して、学生たちが、2年半で約30余りの研究を発表しました。そのほとんどが都筑区や港北ニュータウンを対象にしています（別表参照）。都筑区役所でも、ここ数年は「地域の課題」をリストにして同大学と共有し、学生に研究テーマ候補として提供してきました。

今年さらには一歩踏み込み、これまで新年度の課題は、年度替わりの6月ごろにならないと課題リストが提供されなかった方式を改め、4月の新学期までに提供するよう、時期を早めたそうです。

同区役所の区政推進課長の宮坂彰志さんは「柔軟なアイデアと地域の人たちに役立ちたいというエネルギー・行動力が大学生にはあります」と、連携のメリットを挙げます。また、研究というかたちでまちの活動やデータが長年にわたって蓄積されていくことも重視しています。

東京都市大現代GP 研究事例

- ▼中川おしよくじプロジェクト まちと人をつなぐアートイベント構築
- ▼TimeLineMapを使用した横浜歴史マップの作成
- ▼街のコミュニケーション・ツールとしてのデジタルアーカイブ〜つづき「街の記憶」プロジェクト
- ▼iPhoneのためのTwitterと地図連携システム開発
- ▼PodWalk 音で見る相鉄線沿線ガイド〜携帯電話向け街歩きガイド

News on Demand